

使徒言行録 第9章1～9節

後に使徒パウロと呼ばれるようになったサウロは、熱心なユダヤ教徒でした。パウロはフィリピの信徒への手紙の3章5節以下でこう語っています。新約聖書の364ページになります。【わたしは生まれて八日目に割礼を受け、イスラエルの民に属し、ベニヤミン族の出身で、ヘブライ人の中のヘブライ人です。律法に関してはファリサイ派の一員、熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については非のうちどころのない者でした。】ユダヤ教に熱心だったパウロは、イエス・キリストを偽物だと思い込み、キリスト教徒に対する弾圧をはかります。使徒言行録8章1節では、サウロはステファノの殺害に賛成していたことが記されています。ステファノはキリスト教の初代教会の執事で、イエス・キリスト以外では最初の殉教者として召された伝道者です。このステファノの殉教をきっかけに、エルサレムではキリスト教会の迫害が起こりました。ユダヤ教の神様に熱心だったサウロは、キリスト教を弾圧するために奔走し、教会を荒らしては男女を問わず引き出して牢に送って行きました。そこでエルサレムから逃げ出した人々が各地へと散らされて行きましたが、散らされて行った人々は行った先々で福音を告げ知らせながら巡り歩いて行きました。キリスト教会が弾圧され各地へと散らされていくことによって、キリスト教はユダヤの地域から世界へとだんだんと広がっていったのです。

このようにして広がっていったキリスト教を、なおも弾圧しようとサウロはダマスコの町へ行くために大祭司からの手紙を求めました。それが今日の聖書の箇所です。キリスト者はこのころ、2節にありますように「この道に従う者」、「この道の者」と呼ばれていました。それがやがて「キリストに従う者」という意味で、キリスト者をバカにした言葉としてクリスチャンと呼ばれるようになっていきます。けれどもキリスト者たちは人々からバカにされた言い方を、あえて喜んで「私たちはキリストに従う者」という意味で、クリスチャンという言い方を好んで使うようになって行きました。

さて、サウロはダマスコの町にいるキリスト信者を捕まえようと出かけていきますが、そこで天からの光の中でイエス・キリストと出会います。「サウロ、サウロ、なぜ、わたしを迫害するのか」。サウロが「主よ、あなたはどなたですか」と尋ねると、「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。起きて町に入れ。そうすれば、あなたのなすべきことが知らされる」という答えがありました。その出来事があってからサウロは三日間、目が見えず、食べることも飲むこともしなかったと聖書には記されています。サウロは三日間、社会から断絶されたのです。それはまるで死んだような状態のようでした。おそらくそれは、イエス様が死んでよみがえられる三日間の追体験だったのだらうと思います。その後の出来事は次週の礼拝説教になりますが、三日後にサウロはアナニアというキリスト教の弟子によって助けられます。そのとき、目からうろこのようなものが落ち、目が見えるようになったサウロは、イエス・キリストの名によるバプテスマを受けたことが18節に記されています。三日後にサウロはよみがえったのです。

今日の聖書の箇所は、サウロが回心するきっかけとなったたいへん有名な箇所です。これまでキリスト教を迫害していたサウロが、天からの光の中でイエス・キリストと出会い、三日間、飲み食いもせず目も見えずに、葛藤の中に置かれていました。サウロにいったい何が起こったのでしょうか。復活のイエス・キリストとの出会いは、人それぞれの出来事

なので、みんながサウロと同じような体験をするとは限りません。いやむしろ、このような特殊な体験はほとんどの人が経験することなく、信仰生活を続けていくのでしょうか。それでは、サウロの体験とはいったい何だったのでしょうか。

サウロは、イエス・キリストと出会ったのです。自分がそれまで信じてきたユダヤ教の神様。ところがその神様から遣わされたイエス様を、サウロは信じることができませんでした。なぜならサウロにとって神は唯一のお方であり、人の手からはとても遠いところにおられるお方だったので、神が人となってこの世に来るなどということはあり得なかったからです。しかしサウロは、光の中で神様が遣わしてくださったイエス・キリストと出会います。イエス・キリストこそまことの神であり、それまで自分が熱心に信じてきた神様から遣わされてきたお方であるという真実を知るのです。それはサウロにとって、とても大きな衝撃でした。自分がこれまで迫害してきたイエス・キリストとその信者たちこそ、自分が信じてきたまことの神であり、その神への信仰を持つ人たちであった。サウロのショックはどれほど大きかったことでしょうか。ガラテヤの信徒への手紙1章13節以下には、こんなことが記されています。新約聖書の342ページになります。【あなたがたは、わたしがかつてユダヤ教徒としてどのようにふるまっていたかを聞いています。わたしは、徹底的に神の教会を迫害し、滅ぼそうとしていました。また、先祖からの伝承を守るのに人一倍熱心で、同胞の間では同じ年ごろの多くの者よりもユダヤ教に徹しようとしていました。しかし、わたしを母の胎内にあるときから選び分け、恵みによって召し出してくださいました神が、御心のままに、御子をわたしに示して、その福音を異邦人に告げ知らせるようにされたとき、わたしは、すぐ血肉に相談するようなことはせず、また、エルサレムに上って、わたしより先に使徒として召された人たちのもとに行くこともせず、アラビアに退いて、そこから再びダマスコに戻ったのでした。それから三年後、ケファと知り合いになろうとしてエルサレムに上り、十五日間彼の元に滞在しましたが、ほかの使徒にはだれにも会わず、ただ主の兄弟ヤコブにだけ会いました。】 ここには、サウロがケファと知り合いになるために、このケファとはペトロのことを指していますが、エルサレムに上るまで、ダマスコでの出来事から少なくとも3年の月日がかかっていることが記されています。その間、おそらくサウロは何の活動も行いませんでした。サウロは熱心にイエスを信じる人たちを迫害してきました。ところが彼らは、サウロが熱心に信じていたまことの神を信じる人たちの群れであった。サウロにとって、どれほどショックだったことでしょうか。みなさんも、それまでまったく信じることのできなかつたキリスト教の神がまことの神であるとわかったとき、とても大きなショックを受けたのではないのでしょうか。この出来事を通して、サウロは偉大な伝道者パウロへと変えられていきます。新約聖書にいくつもの手紙を残した使徒パウロ。けれどもその生涯は決して幸せではありませんでした。

ダマスコへと向かう道中、光の中でイエス・キリストと出会う前まで、サウロは誇りを持って生きていました。けれども、キリストと出会ったパウロは、それまでの自分の地位や名誉、自分の力で得てきたものをすべて失いました。キリストとの出会いによって、この世のすべてのものを失ったのです。コリントの信徒への手紙二の11章21節以下で、パウロはこう語っています。新約聖書338ページです。【言うのも恥ずかしいことですが、わたしたちの態度は弱すぎたのです。だれかが何かのことであえて誇ろうとするなら、愚か者になったつもりで言いますが、わたしもあえて誇ろう。彼らはヘブライ人なのか。

わたしもそうです。イスラエル人なのか。わたしもそうです。アブラハムの子孫なのか。わたしもそうです。キリストに仕える者なのか。気が変になったように言いますが、わたしは彼ら以上にそうなのです。苦勞したことはずっと多く、投獄されたこともずっと多く、鞭打たれたことは比較できないほど多く、死ぬような目に遭ったことも度々でした。ユダヤ人から四十に一つ足りない鞭を受けたことが五度。鞭で打たれたことが三度、石を投げつけられたことが一度、難船したことが三度。一昼夜海上に漂ったこともありました。しばしば旅をし、川の難、盜賊の難、同胞からの難、異邦人からの難、町での難、荒れ野での難、海上の難、偽の兄弟たちからの難に遭い、苦勞し、骨折って、しばしば眠らずに過ごし、飢え渴き、しばしば食わずにおり、寒さに凍え、裸でいたこともありました。このほかにもまだあるが、その上に、日々わたしに迫るやっかい事、あらゆる教会についての心配事があります。だれかが弱っているなら、わたしは弱らないでいられるでしょうか。だれかがつまづくなら、わたしが心を燃やさないでいられるでしょうか。】

サウロはダマスコへの途上で復活のイエス・キリストと出会ったことで、生活が一変します。それまでユダヤ教の名誉ある教師として誇りをもって生きてきたサウロでしたが、復活のイエス・キリストと出会い、使徒パウロとなったサウロはすべてを失います。彼は迫害を受け、何度も死にそうな目に遭います。まわりから見れば、パウロの生活は復活のキリストと出会ってからとてもひどいものとなりました。けれどもパウロは、フィリピの信徒への手紙3章7節以下でこう語るのです。新約聖書364ページです。【しかし、わたしにとって有利であったこれらのことを、キリストのゆえに損失と見なすようになったのです。そればかりか、わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみています。キリストのゆえに、わたしはすべてを失いましたが、それらを塵あくと見なしています。キリストを得、キリストの内にいる者と認められるためです。わたしには、律法から生じる自分の義ではなく、キリストへの信仰による義、信仰に基づいて神から与えられる義があります。わたしは、キリストとその復活の力を知り、その苦しみにあずかって、その死の姿にあやかりながら、何とかして死者の中からの復活に達したいのです。】 このように生活は苦しくなり迫害されても、パウロは喜んでキリスト者としての生活を、生涯、送り続けたのです。

イエス・キリストと出会うこと。それは、この世での生活が楽になることではありません。いやむしろ、パウロのようにイエス様に従ったがゆえに、かえって生活が苦しくなることさえあります。この世の地位や名誉、この世で自分が得てきたすべてのものを失ってしまうかもしれない。けれどもパウロは、それらのものをただ失ったものではありませんでした。それらのものに頼って生きてきた自分の生き方が変わったのです。この世の地位や名誉や力により頼む生き方から、ただ一人の主であるイエス・キリストだけにより頼む生き方に変えられたのです。そしてそのような生き方は、この世の地位や名誉や力では決して得ることのできない心の平安、神様の平和に満たされた生き方なのです。パウロは主と出会いすべてのものを失いましたが、それらでは決して得ることのできない主の平安をいただいたのです。私たちもパウロのように、まことの主との出会いを通してまことの平安をいただくことができるようになりたいと願います。

お祈りしましょう。